



# 観山正見 ・天文学データ解析計算センター長の記憶

伊藤孝士 国立天文台 天文シミュレーションプロジェクト・天文データセンター

観山先生と私の公式な出会いは平成7年4月、私が国立天文台天文学データ解析計算センターの助手として採用された時であり、センター長と新人職員という関係での対面であった。上司と部下というこの精神的関係性は観山先生が退職されるまで不変であったように思う。これは国立天文台に於ける私の職場が共同利用計算機の運用を主とする現業部署であることが強く関係していると思うが、私は観山先生を研究者として見たことはほとんど無い。言ってみれば民間企業に於いて平社員が部長を見上げる感覚であった。

私が観山センター長の直下で働いたのは平成7年度の一年間のみだったが（その後で観山先生は国立天文台の企画調整主幹に昇任され、センター長を辞任された）、それは驚きと衝撃の一年間であった。大雑把でのんびりとした地球物理学専攻の大学院生活から突然に右左の分からぬ天文学業界へやって来た私にとり、環境の変化はただでさえ小さくなかった。しかも国立天文台は大学ではなく文部省直轄（当時）の研究所であり、天文学データ解析計算センターはその中でも研究部ではなく共同利用を主とする現業部門である。その上、観山先生らの長年の活動が実りこの年度の終盤には国立天文台三鷹初のスーパーコンピュータが天文学データ解析計算センターに導入されることが決まっており、私が着任した時期はそれに関わる政府調達や予算請求・施設整備と言った一連の作業の真最中であった。計算機の性能についても予算の規模についても今まで全く目にした事の無い数字を扱う職場に飛び込んでしまい、私の生活は一変した。無論それは私自身が希望した道であったものの、そこではあらゆる物事が「実社会」に近かった。それまでは実社会などから甚だしく遠い世界でのほほんとして学生生活を送って来、社会常識など何ひとつ身に付けていなかった私は到るところで失態を犯し、その度に上司すなわち観山センター長から強く叱責を受けた。例えば管理部（現在の事務部）職員に対する私の接し方がまずくて軋轢を起こし、進むはずの事務作業が完全に停滞して観山センター長が仲裁に入らざるを得なくなったことは一度や二度では無い。技術系職員や非常勤職員に対して何かにつけて高圧的な態度を取る私に対し観山先生が平手をかまさんばかりに怒り、大声で罵倒されたこともある。私は計算機ベンダから派遣されたエンジニアや営業担当者への対応方法もさっぱり分かっておらず、会議などで青臭い発言を

することが多々あった。すると観山センター長は直ちに「今の発言は伊藤個人の認識であり、当センターの見解ではないので無視してください」と私の発言を取り消され、後から別室に呼ばれてこっそりお説教を頂いたこともある。霞ヶ関などにも出回る公的出版物にセンター内で発生している赤裸々な事実や裏話を記そうとしたら「君はその歳になって本音と建前の使い分けも出来ないのか？」と言われて記事の根本的な書き換えを要求されたのも、国立天文台ニュース編集長の観山教授からであった。ちょっと思い出ただけでこれほど次から次へと失態の思い出が溢れ出ると言うことは、都合が悪すぎて私の記憶から消去された案件はその何倍、いや何十倍とあったに違いない。ひとえに私の実社会的常識の欠如および身勝手極まりない性格に、20代後半という若気の至りが加味されて発生した醜態の連続であった。かくも問題の多い新人職員を抱えつつも計算機センター長として前例の無いスーパーコンピュータ導入とそれを基礎とした大規模数値シミュレーション天文学の振興を実現しようとしていた観山先生の忙しさと精神的負荷は凡人の想像を大きく超えるものであったろう。そうした計算機センター長という役割に加え、当時の観山先生は理論天文学研究系（現在の理論研究部）の主幹をも兼務されていた。個性豊かな人材を数多く擁する理論天文学研究系の運営も容易ならざるものであったと想像するが、そうした激務の負担や重圧を周囲の人間には少しも感じさせない活力がああ頃の観山先生の表情には満ちていた。私は失態を犯し観山先生に叱責される度に「これが世の中と言うものか」と少しずつ学習しながら、来たるべきスーパーコンピュータの導入とその運用に向けて右往左往しつつも自分なりに努力する日々を続けた。それ以来現在に到るまで、観山先生に対して持つ私の感覚はやはり一人の上司でしか無い。人生初の職場に於ける人生初の上司として観山先生を戴いたことを幸運と言う人もいれば試練と呼ぶ人もいたが、どちらにせよあの一年の経験はそののち私が実社会と接する上での考え方に消し難い刻印を残した。

その後の観山先生については記すまでも無いが、企画調整主幹を経由して台長までの階段を一気に登られた。私は飽くまで共同利用の現場に拘り続け、ひたすら計算機システムの運用に携わって18年が過ぎようとしている。台長になられてからの観山先生は計算機共同利用や数値天文学から敢えて距離を置かれているようにも見たが、退任直前の平成23年秋には次期のスーパーコンピュータシステム（平成25年度稼働開始）を水沢VLBI観測所に設置するよう台長命令を下賜され、国立天文台に於ける数値シミュレーション天文学の「創業社長」たる存在感を示す格好になった。このスパコン水沢設置命令は私のような現場の人間や水沢在住の方々にとり完全なる晴天の霹靂であり、内外に与えた衝撃は極めて大きなものであったが、

台長として数値天文学分野のみならず国立天文台の生き残りまでを考えた観山先生の遺言的決断だったろうと私は解釈している。その方針は林正彦・現台長にも踏襲された模様であるから、私としてはこの命令を実現すべく淡々と業務に従事して、観山先生が天文学データ解析計算センター長として灯した数値天文学に於ける計算機共同利用活動の火を絶やさぬよう努力を続けるだけである。

ほぼ余談になるが、私と観山先生は一本だけ共著論文を出版したことがある (Ito & Miyama 2001, *Astrophys. J.*, 552, 372-379)。世界的に太陽系外惑星の研究が本格化しようという時期の研究だが、私達は長期の惑星運動安定性を数値的に検証することで系外惑星の質量上限を推定しようと試みた。当時は現在のように系外惑星のトランジット観測が盛んではなかったので、粗っぽくはあったがこの計算は斬新な試みであり、その方向性は現在でもそこそこ生きていと信ずる。私の国立天文台生活に於いてこの論文は砂漠の荒野を旅する中で邂逅した美しいオアシスのような位置を占めており、長くは無かったもののそこに留まった日々は私が観山先生を上司としてではなく同業研究者として認識した唯一の時間であった。この論文は国立天文台研究教育職員一覧の観山先生のページに於いて「主な研究業績・論文」の第一本目として御退職時まで掲載されており、それは私の秘やかな自慢であった。

上司と部下という関係に於いては観山先生と私が同じ写真の中に収まる機会など全く無かった。昔の写真を何とか引っ張り出したが、私達が一緒に写ったものではない。写真は国立天文台三鷹に初めて導入されたスーパーコンピュータ (VPP300/16R, VX/4R ら) の調達過程に於ける実機ベンチマーク試験のために富士通沼津工場に出向いた際のものである (平成7年12月24日)。東海道新幹線三島駅改札口に於ける朝の集合時刻に撮影したものと記憶するが、ここには長年の盟友で



ある小笠原隆亮さんら他の関係者と共に、やや緊張した面持ちで侘む観山正見センター長の顔が見られる。

東海道新幹線三島駅改札口にて (平成7年12月24日)。